医心伝心

WEBによる癌性疼痛治療コンサルテーションシステム

富山県医師会監事　鷹西　敏雄

今年の春に余命2ヶ月と宣告されていた末期癌患者の訪問診療を依頼された。5年前の健康診断で大腸癌が見つかり手術をするも、その後、肺や脳に多発転移し、脳腫瘍の拡大による下肢の麻痺や意識レベルの低下を認められた。サイバーナイフ治療により回復傾向であり、幸いにして疼痛の程度は軽く、食事も普通に食べられるため、御本人、御家族とも自宅での療養を希望されてのことだ。サイバーナイフの治療効果もあるが、患者さんにとって自宅に帰れるということはそれだけでもかなりなプラス要因である。しばらくするとトイレや浴室への歩行も可能となり、食欲の増進による体重の増加も認め、また、御家族や親類との会話も楽しめた事により、むしろ退院した1ヶ月後の方が、調子の良い状態となった。癌の痛みも、最初は頓服程度でも疼痛コントロール可能な状態であったが、その頃から非麻薬性の鎮痛薬のみの定期的な内服が必要となり、2ヶ月ほどで麻薬製剤が必要となった。

開業前までは大学病院の麻酔科でオピオイドローテーションや神経ブロック、PCA（patient controlled analgesia）など、癌性疼痛治療は経験していたが、最近は麻薬施用者免許の更新のみで、いざ処方開始となると何から始めようと迷ってしまう次第である。幸運にも大学時代の同年代が教授であるため、最新の疼痛コントロールの指針を直接聞くことが可能で、刻々と変わる痛みや、各種副作用への対応へも改めて学ぶことが出来、大変役に立った。しかしながら、骨転移が原因による圧迫骨折で、腰痛の悪化と両下肢の麻痺が出現したため、最終的には緩和ケア病棟への転院となってしまったが、3ヶ月以上自宅での生活が可能であった事に対しては、本人や家族にとっても大変有益な時間っだったと思われる。

今回は私の周りに気軽に相談の出来る相手がいたから良かったが、最近では、難治性癌疼痛に関して周囲に相談出来る医師がいない、相談できる窓口がわからない医師に対し、治療法について相談のできる体制のモデル構築を目的として、WEB（https://challenge-canpain.net）上での医師向け専門的癌疼痛コンサルテーションシステム「CHALLENGE-CanPain」の運用が開始されており、日本国内の医師であれば誰でもシステムに登録して、専門的癌疼痛治療に関するコンサルテーションを各分野のエキスパートに相談できるシステムとなっている。専門的癌疼痛治療として、緩和的放射線治療、神経ブロック、脊髄鎮痛法、椎体形成や動脈塞栓術など画像下治療（IVR）、メサドンによる薬物療法などを想定しているが、相談された症例に応じて複数の専門的癌疼痛治療法はもちろん、他の治療法やケアについても提案してもらえる。また、必要な場合にはコンサルトの所属する病院やその他全国の中核病院への受け入れに関する相談も行っている。画像データなども送付可能であり、電子メールでのやりとりにて簡便に、無料で相談できるという利点がある。そのほかにも、専門家同士のネットワークとして、麻酔科・ペインクリニック科医による癌関連疼痛の専門的治療に関しての情報共有や意見交換を行う「JANP-TEC」の運用も2024年5月より開始されている。参考にされてみては如何でしょうか。